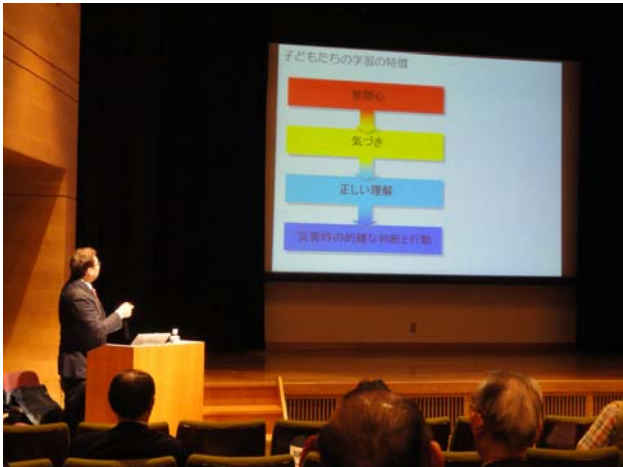


テーマ 「災害知見と教訓をどうやって子どもたちへ伝えていくか」

講師 富士常葉大学社会環境学部 木村玲欧 准教授

※ 聴講者数 60名



## 1. 講演の概要

セミナーでは、将来、社会の中核を担う小中学校などの子どもたちが、災害・防災というものに対して「気づき」を持ち、災害を理解し、災害に対する「わがこと意識」が向上し、災害に対する対策・対応行動を促進するような、防災教育プログラム・教材のあり方について、心理学・教育学の観点から講演しました。

具体的には、1944 年東南海地震・1945 年三河地震を題材として、地域の歴史災害における被災者の体験談に注目し、被災体験談を知ることで子どもたちが「気づき」をもち、災害・防災の知見・教訓を理解できるような教育プログラム・教材の作成手法について、被災地である愛知県安城市での教育実践を例にとりて紹介しました。

## 2. 体験談の紹介～沓名美代さん・鈴木敏枝さんの被災体験

講演ではいくつかの被災者体験談を紹介しましたが、ここでは、安城市での教育実践において教材化することになった「沓名 美代(くつな・みよ)さん(当時 11 歳)、鈴木 敏枝(すずき・としえ)さん(当時 15 歳)姉妹」の体験談を、以下に紹介したいと思います。

鈴木敏枝さんは昭和 4 年、沓名美代さんは昭和 8 年生まれの姉妹。地震発生当時は 15 歳と 11 歳。愛知県碧海郡明治村和泉集落(現在の愛知県安城市和泉町)に住んでいた。

1944 年 12 月 7 日の東南海地震が発生した午後 1 時すぎ、妹の沓名美代さんは尋常小学校の 6 年生でお宮参りをしていた。地面の揺れが大きかったので男子生徒があわてて神社の灯ろうにしがみついたところ、灯ろうがゆれ始めたので、先生があわてて「灯ろうから離れろ！」と叫んだ。一方、姉の鈴木敏枝さんは農家である家の仕事を手伝っていて麦畑の中にいた。中腰になりふらふらになりながら家までたどり着いたところ、寝泊まりをする本宅(母屋)が傾いてしまっていたために、父親が「こんな傾いた家で寝泊まりするわけにはいかない」と、本宅の横にあり、普段は寝泊まりをしない横屋の座敷に移って生活することになった。

1945 年 1 月 13 日の三河地震は深夜 3 時 30 分過ぎの地震であった。本宅は全壊したが寝泊まりをしていた座敷は無事で、家族は助かった。小学生だった美代さんは逃げ込んだ藁(わら)小屋の中で毛布をかぶって震えているしかなかった。外へ出たときの壁土のほこりとおおい、生き埋めになった人の「助けて、助けて」という泣き声は、今でも鮮明に覚えている。助けにいきたくても、自分の家がそれどころではなく、ガレキの山で道路がふさがれてしまい、助けに行きようがなかった。突然、隣りのおばさんが「火事だ」と叫んだため姉の敏枝さんがバケツを持ってかけつ

けたところ、仏壇が月明かりに照らされて光っているだけで事なきをえた。

周囲の家はほとんど全壊した。毎日、寒空の下、素手素足で着のみ着のまま、朝から夜まで片づけをした。親せきなども同時に被災したため、片づけを誰かに手伝ってもらったり、物資をもらったりしたことはなかった。周囲で1軒だけ倒れていない家があった。大工の腕が悪く、家が自立しないために筋交いを入れていた家だったが地震のときには倒れなかった。木は全部燃料として燃やし、かわらは地割れの中に捨てた。和泉集落では80 数名が亡くなったが、火葬場の煙突が壊れ、また、あまりに多くの人々が一度に亡くなったため火葬はできず、穴を掘って集団で土葬した。火葬しなかった理由には、軍の基地が近く、頻繁に空襲警報がでるような情勢だったことも影響したかもしれない。

家が倒壊したため、炊事は数家族が共同で行い、露天で一緒に食事をした。農家のため食料はあり、井戸水は洩れなかったため水の不自由もなかった。地震で死んだ農耕牛を食べることができたのは子ども心によい思い出である。1 週間くらいして落ち着いてきたときに、お座敷のふすまや雨戸を外して四面に囲い縄でしばって「ふすまの家」を作った。すき間から雪が家の中にまで降ってきてたいへん寒かった。数週間したときに、父親がお風呂(五右衛門風呂)を屋外へ作った。近所の人たちも入りにきて行列になった。お風呂に入ったときに体も心もほっと一息つくことができた。

1 ヶ月くらいしてきれいに片づけたあとに、藁(わら)などで小屋を作った。農家なので藁はあったし、家を作るくらいは当時の農家の人たちの技術からするとお手のものだった。これらの小屋は「地震小屋」と呼ばれた。学校は3 ヶ月くらいして再開した。学校も地震で全壊したために、空き地に縄をはってクラスを作り、先生は首から黒板をかけて授業をした。雨が降ったり空襲警報が鳴ったりするたびに授業が中断したため、戦争が終わるまではほとんどまともに授業ができなかった。

### 3. 体験談をもとにした教材の作成

上記の被災体験談をもとに、教材(ワークシート)の作成を行いました。被災体験談を教材に取り入れるのは、子どもたちの学習の特徴を教材に反映させるためです。

防災に関する子どもたちの学習の特徴として「無関心、気づき、正しい理解、災害時の的確な判断と行動」という4段階による学習過程を考えることができます。この中で、特に子どもの学習にとって肝要なのが「気づき」です。指導者の立場で言うといわゆる「つかみ」で、子どもたちが「対象に対して興味・関心、好奇心、不思議さ、疑問が湧き上がる」という気づきの部分を誘発することです。子どもが気づきを持ったことを指導者側が把握することによって初めて指導計画が展開し、子どもたちの気づきを受けて提供されたときに教材や資料が初めて有効になります。子どもにとって気づきを誘発しやすい事象として、いわゆる伝記に代表されるような「1 人の人間が、時間経過に伴ってどのようなことを考えて行動し、どう変化していくか」という人間に焦点を当てた物語があげられます。そのため、子どもの気づきを誘発するための教材として、自然現象の原理・法則についての解説ではなく、時間経過に伴う被災者の実際の被災体験を材料としたのです。

沓名美代さん・鈴木敏枝さんの体験談をもとにして作成した教材の一部を紹介すると、「沓名美代さん・鈴木敏枝さんは、地震でどんな体験をしたのでしょうか。絵をヒントに思い出してください」というリード文の下に、質問に対して絵を見ながら場面を思い出すような問いを立てていきました。例えば、問1 では「神社にいるときに地震が起きました。その時に、男の子がとても危険なことをして先生に怒られました。男の子はどんな危険なことをして怒られたのでしょうか」という問いを立て、絵を見ながら「地震でゆれて、くずれそうになっている石のとうろうにしがみついた」という回答例を期待します。問2 では「夜の地震で、ふだん住んでいた家は全壊したのに、家族は誰も亡くなったりケガをしたりしませんでした。なぜ、みんな無事だったのでしょうか」という問いを立て、「12月の地震で家(母屋)が傾いたので、父親が『こんな家に住んだらいかん』と言って、傾いていなかった家(横屋:横にある座敷の家)で寝ていたから」という回答例、問3 では「近所で1軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか」という問いを立て、「へたくそな大工さんが建てた家で、家が倒れないように筋交い(すじかい)を入れていたから」という回答例、といったように、災害後のそれぞれの場面について絵を見ながら想起・再生することで、災害・防災の知

見・教訓の理解に結びつくようなワークシートを作成していきました。